

大名家と酒蔵

加賀藩前田家 と やちや酒造



加賀藩祖、前田利家は、織田信長から柴田勝家の与力として、能登一国を与えられました。賤ヶ岳で柴田勝家と袂を分かち豊臣秀吉に与し秀吉の天下取りに大きく貢献して加賀、越中能登の120万石を得ました。その後、三代利常のときに弟たちに分封して100万石となります。外様大名ですが最大の藩として徳川幕府御三家と同格の大藩下詰めを許されています。

やちや酒造は利家が織田信長に能登一国を与えられたときに前田の殿様専用の酒造り人として尾張の国から一緒に移り住んだと言われています。天正十一年(1583年)の事です。安土桃山時代から加賀百万石の宴の酒として平成の世に引き継がれた正に戦国時代を生き抜いた代表的な酒蔵です。

秋田藩佐竹家 と 鈴木酒造



佐竹氏は室町時代より常陸の国の守護職の家柄であり、18代当主義重は近隣諸国を切り従え謀略にも長け戦国時代には常陸統一を成し遂げました。又、甲斐武田氏と同盟を結び北条氏と対決したり奥州南部にも進出し伊達政宗とも対決しました。嫡男義直は豊臣秀吉の小田原の役に参陣しています。関が原の合戦の折に西軍に内通した為に咎められ秋田に移封されました。

鈴木酒造は元禄二年創業の名門。秋田久保田城下に於いて酒合戦をしたところ特に佐竹の殿様に気に入られそれまでの御用酒「清正」より優れているとの由、以後「秀よし」と命名せよとのご下命を賜わり。嘉永元年(1848年)秋田佐竹藩内の御用酒に指定されました。

佐賀藩鍋島家 と 窓乃梅酒造



藩祖、鍋島直茂は西九州を席卷した戦国大名龍造寺家の家老であったが龍造寺家の衰退によってその領地を継承し秀吉、家康に所領を安堵されました。秀吉の朝鮮出兵や関が原の戦いに大将として戦い、正に戦国武将としての地位を築きました。佐賀藩は外様大名として幕末まで続きますが戊辰戦争では薩長土肥として明治維新に貢献しました。窓乃梅は九州でいち早く純米に取り組んだ蔵元です。今では昔ながらの「木桶仕込」を復活させ人々には厳しくても酵母菌には優しい環境の中で日本古来の伝承技術を継承しています。「年々にさかえさかえて名さえ世に香りみちたる窓乃梅が香」時の藩主鍋島直正公より賜った句です。

彦根藩井伊家 と 岡村本家



彦根藩は西国押さえの位置づけにあり「井伊の赤備え」と恐れられていましたが井伊直政は関が原の合戦の折、島津義弘追撃戦で受けた怪我が元で亡くなりました。佐幕が倒幕かでゆれる幕末に大老になった井伊直弼は安政の大獄と言われた強権を断行したために水戸浪士らによって桜田門外で暗殺されました、いわゆる「桜田門外の変」です。

岡村本家はその井伊家より酒造りを命じられ近江商人の教えでもあります勤勉、潔白、三方よし(売り手よし、買い手よし、世間よし)の精神を受け継ぎ今日も酒造りを続けています。

紀州藩徳川家 と 玉乃光酒造



紀州藩は徳川御三家の一つであり家康の10男徳川頼宣が藩祖とされていますが、関が原の戦いのあと紀州は浅野家が治めていました。その後、福島正則の改易とともに広島へ浅野家に移り、頼宣が入封して紀州徳川家が成立しました。

玉乃光酒造は延宝元年(1673年)初代中屋左衛門が和歌山市寄合町にて紀州藩の二代藩主 徳川光貞公(家康の孫)の免許で創業しました。現在は京都伏見に移転して純米吟醸酒に最も力を入れているお蔵の一つです。

越後長岡藩牧野家 と 柏露酒造



初代牧野忠成は関が原の戦いの折、徳川秀忠に従い前哨戦として信州上田城の真田親子を攻めるべく出陣しましたが関が原の陣に間に合わず家康の怒りをかい蟄居させられましたその後塾居も解かれ大阪冬の陣、夏の陣にも参陣して大阪落城に寄与しました。大御所家康の死去に伴い秀忠の家臣として戦国武将から譜代大名になり越後長岡藩の立藩を果たしました。

柏露酒造の歴史は藩主牧野家の酒蔵を御用商人、越中屋が宝暦元年(1751年)に譲りうけて以来、良質の水と最高の米を使い、伝統の技と酒造りの心を淡麗辛口の一滴に醸して来ました。

会津藩松平家 と 末廣酒造



会津地方は戦国大名、輩名氏から伊達政宗になり秀吉の奥州仕置きによって蒲生氏郷に与えられ、次に越後から上杉景勝が入封したが関が原の戦いで景勝は米沢に減封となった。蒲生秀行が入封したが伊予松山の加藤家に又も代わってし再び東軍に味方した。これだけ藩主が替わった国も珍しいが最終的に二代将軍秀忠の子の保科正之が幕末まで続き戊辰の役では新政府軍を相手に壮絶な戦いをしました。末廣酒造の原点は「地酒にあり」と誇る会津に育った頑固者にあるようです。先人からの教えと磨きぬかれた技で醸す会津酒に酔いしれてください。

津軽藩津軽家 と 玉田酒造



津軽地方を治めた津軽氏の祖は大浦為信であり、もともと南部家の家臣であったが主家に先んじて、豊臣秀吉の小田原征伐にいち早く参陣し、秀吉から直接津軽地方の所領を安堵され南部家から独立したため、その経緯により南部藩との係争が絶えませんでした。大浦家は後に津軽氏と称し、弘前藩として12代に亘って最北の地を支配しました。石高は4万7千石でしたが新田開発に取り組んだ為、実高30万石を超えていましたが厳寒の地は度々の凶作により財政は常に逼迫していました。

玉田酒造の創業は貞享2年(1685年)江戸時代前期とされています。津軽4代藩主信政公が藩主玉田善兵衛に酒造資金を下賜し歴代藩主の御用酒蔵として津軽藩の宴を司ってきました。酒質は吟醸香が程よくフレッシュで飲みやすさの中にも躍動感がありすっきりとした軽快な飲み口です。

小田原藩大久保家 と 中澤酒造



戦国の風雲児 伊勢新九郎早雲(北条早雲)が西相模を切り取り早雲の嫡男「氏綱」が小田原城を根城としたのが小田原北条氏の興りでした。後に関東一円を治め駿河の今川氏や甲斐の武田氏らとも一戦を交えています。上杉謙信の城攻めにも耐えた小田原城でしたが、天正18年(1590)に豊臣秀吉の小田原征伐で軍門に下り、徳川家康が替わって関東八ヶ国を治めることになりましたがその時譜代の家臣であった大久保田忠世が家康の命により小田原を治めることになりました。忠世は家康の下16歳で初陣を飾り幾多の戦場で功績を認められました。大久保家

中澤酒造の創業は文政8年(1825)で現当主「鍵和田 茂」氏は10代目になります小田原藩の御用商人としてお城にお酒を納めていましたが藩主より「松美西」の名を賜りました。今でも昔ながらの麴造りに始まり、ふねによる上槽まで全量手造りにこだわっています。

松代藩真田家 と 松葉屋本店



関が原の合戦に於いて知将 真田昌幸(幸村の父)は家康方に信之(幸村の兄)をつかせ自身は幸村と共に豊臣方に味方し上田城に於いて関が原に向う徳川秀忠の大軍を釘付けにした関が原に遅参させるという大働きをしました。

しかしながら、関が原の戦いも小早川秀秋の裏切りによってあっけなく徳川方の勝利に終わりました。やがて大阪冬の陣、夏の陣になりますが、あの家康に死をも覚悟させた猛将真田幸村も討ち死に致しました。

徳川幕府はその真田信之に信濃代13万5千石を与えました。戦国大名 松代藩真田家の始祖になります。

松葉屋本店の創業は定かではありませんが江戸時代中期と言われており現蔵元は14代目となります。松代藩御用酒蔵として酒道、北信流を今に伝えております。今回使用の家紋は真田家幻の家紋「結び雁金紋」を使用いたしました。